



# いのちの川

第9号 (2016年1月号)

<http://nssk.org/province/genpatsugroup/> (ホームページは日本聖公会管区事務所の諸委員会からリンク)

原発問題プロジェクト

検索

## 原発がなくても電力は足りていた

原発と放射能に関する特別問題プロジェクト  
運営委員長 司祭 ヨハネ 相澤牧人

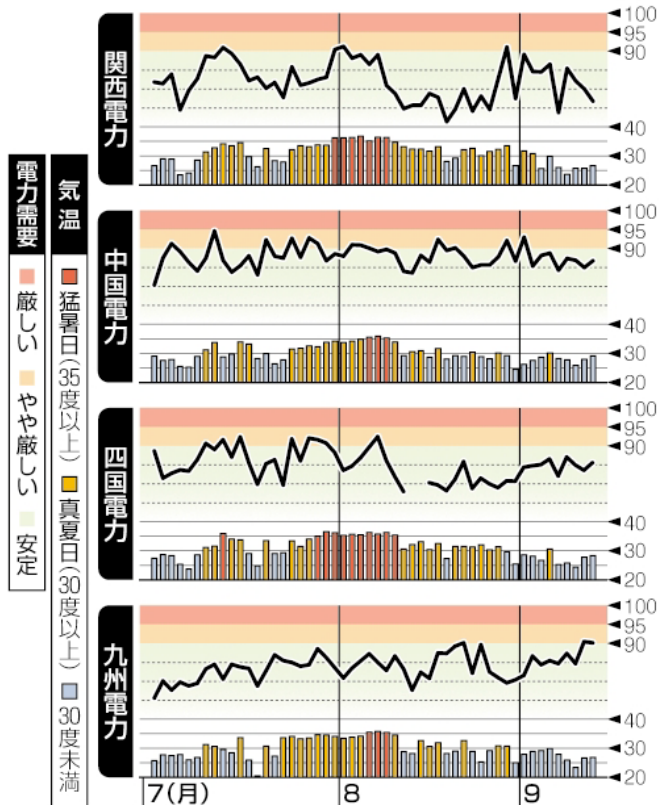
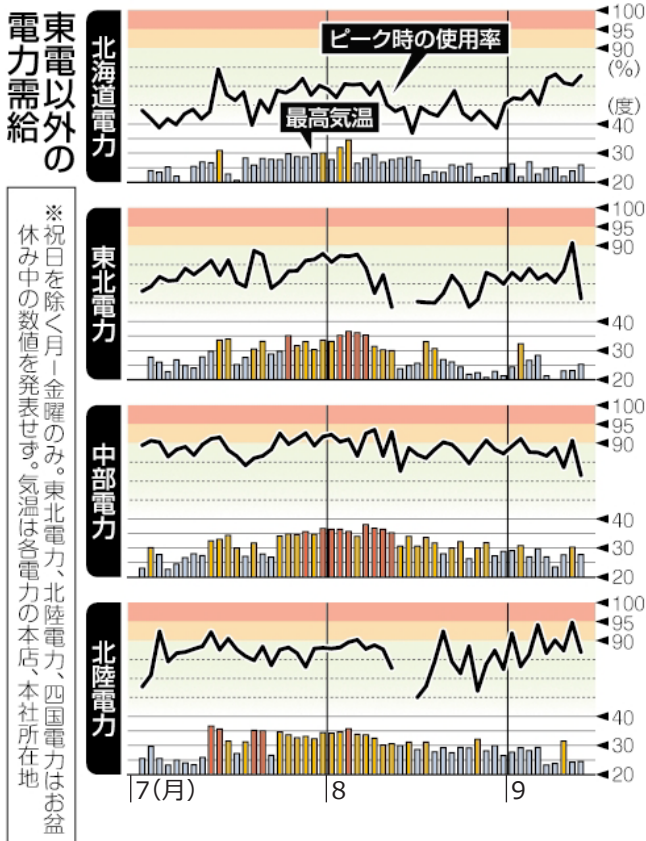
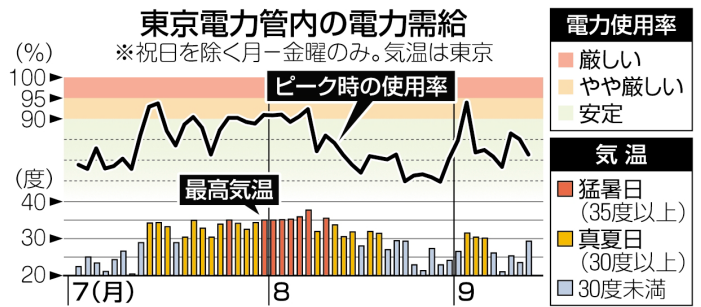
私は二つの新聞を購読している。その一つは東京新聞であり、この記事を読んだ。そしてやはりそうだよね、と思った。原子力による発電は必要なのか、と考える。再稼働を願う人の思いは、どこか別のところにあるのではないか。経済優先、動かすほど儲かるという意識、地元経済の原発依存…。

衝撃的な記事と深くうなずく記事の二つに出会った。「バスの中で、お年寄りに席を譲ろうとしない男の子に、おじいさんが諭す。『君が年を取った時にも、席を譲ってもらえないぞ。』『僕は絶対に年を取らないもん』』と言り返す男の子。『なぜだね?』と聞くおじいさんに『ぼくらはみんな、もうすぐ死んじゃうから』。チェルノブイリ原発事故後、現地ではこんな会話が聞かれたという。』(東京新聞・筆洗)

### “電力需給今夏も余力”

【東京新聞記事 2015年9月28日 1面掲載】

原発のない沖縄を除く電力会社9社に、2015年7月～9月までの需要が高まるピーク時の電力使用率を取材した。電力会社間の融通、太陽光発電、火力発電によるものだが、節電効果が大いいと、電気事業連合会では説明している・・・というもの。



※データ使用に関して東京新聞から許可を得ています。

ある男が美しい妻と仲睦まじく幸福に暮らしていたが、犬に脅かされて妻が狐の正体をあらわす。だまされたと知って男は驚くが、だまされていた時の幸福を忘れられず、もう一度化けてくれと頼む、という説話があるそうだ。これを原発に置き換えて考えてみるのだ、と。「福島で事故で安全神話のまじないは解け、正体が露わになった。それなのに昔が忘れられず、もう一度化けてくれと頼みこむ。」(朝日新聞・天声人語)

安全と言うが、その「安全」とは何かが十分に検証されていないのではないかと思う。もし、放射性廃棄物の無害処理が出来るようになり、事故の避難計画が現実的で万全であるのなら、原子力発電も許されるのかもしれないが、そうではない。事故が起きないのなら良いというよりも、最後に出て来る廃棄物が無害処理できることが安全ということなのではないだろうか。それは出来ていない。

ましてや原発が稼働していなくても電力は足りていたという事実は、見逃してはならないことだろう。それは選択する答えを教え示しているのではないだろうか。

私たちは、主イエスから「いのち」を大切にすることを教えられている。それは真実である。そのために教会は存在するのだろうし、その視点をもって社会と関わることなのだと思う。電気は必要である。そして「安全な」発電方法は様々にある。そこに人間の知恵を集約して行くことが尊いことだと思う。

ー引き続きご支援をお願い致しますー

郵便振替口座 00120-0-78536

口座名 日本聖公会

「原発問題プロジェクトのため」と明記して下さい。

支援チームより ～2015年リフレッシュプログラム報告～

皆さまのお祈りに支えられながら次のような活動を行いました。

●郡山セントポール幼稚園

- 6月 / アクアマリンふくしま(いわき市)・ふれあい科学館(郡山市)
- 8月 / 亀が城公園(耶麻郡猪苗代町)
- 9月 / ふれあい科学館(郡山市)
- 10月 / 亀が城公園(耶麻郡猪苗代町)
- 11月 / 「ロケットくれよん」コンサート・牛島和美さん(九州教区)コンサート・ふれあい科学館(郡山市)

福島県の多くの子ども達は今でも外遊びが十分に出来ず、落ちていた石や植物などにも自由に触る事が出来ません。このような状況によるストレス、運動能力の低下や肥満など、親が抱える不安は4年と9カ月が経った今でも計り知れないものがあります。園外保育では、放射能線量の低い安全な場所で思う存分外遊びができます。自然から受ける癒しの力により、心身共にリフレッシュ出来ます。



▲亀が城公園で思い切り走る園児

・子育て中のママを応援するプログラム『PAX』

- 6月 / 赤ちゃんヨガ&マッサージ教室
- 10月 / 秋のアロマ・トリートメントクリーム作り
- 11月 / スマイルひろば(郡山セントポール幼稚園) 赤ちゃんヨガ&マッサージ教室

◀赤ちゃんヨガ&マッサージ教室でスキンシップを通し母子共にリラックス

▼国立ひたち海浜公園で元気に遊ぶ、笑顔いっぱいの園児達



●小名浜聖テモテ幼稚園

- 5月 / 国立ひたち海浜公園(日立市)
- 10月 / 奥日立きららの里(日立市)
- 11月 / ムシテックワールド(須賀川市)





## ●夏休みのプログラム



### 7月～8月/『長崎県の南の島で夏休み in 高島』

聖公会関連幼稚園の園児とその家族を対象としたこのプログラムは、九州教区の暖かいご支援で実施しており、今年で4年目。海水浴や魚釣り、虫取り、島内散策などのんびりと過ごしました。高島の海では色とりどりの魚がたくさん泳いでおり、海中はまるで水族館の中を覗き込んでいるかのようでした。釣った魚は九州教区のボランティアの皆さんに調理して貰い、美味しく頂きました。

また、長崎市内や硫黄島、軍艦島などの高島周辺の観光も楽しむ事が出来ました。家族それぞれ心身共に癒され、リフレッシュ出来た貴重な経験となりました。

### 8月15日～21日/ 『FUKUSHIMA リフレッシュキャンプ In ぎふ2015』

社会福祉法人名古屋キリスト教社会館の支援による、子どものみを対象としたこのキャンプも今年で2年目。思いっきり自然を楽しむーきれいな小石を拾ったり、草木に触れたり、流れる川の中で思いっきり遊ぶ。人との出会いを大切にすー出会いによってたくさんの事に気づき、気付かされ、それを大切な成長の糧とすること。この7日間のキャンプはかけがえのない宝物を子ども達に与えてくれました。



## ●One Family 沖縄



### 8月/『沖縄でホームステイ』

沖縄教区のご支援により今回初めての試みです。沖縄教区の教会の聖職・信徒、幼稚園・保育園の職員、及び園児家族に福島県からの家族をホームステイさせて頂くというものです。ホームステイ先では同年齢の子どもや、親族との交流を深める事が出来ます。沖縄教区の方々にはこれ以上ないというほどあたたかく迎え入れて頂き、美しい自然や文化に触れ、参加した家族にとって素晴らしい体験となりました。

### 6月・10月/保育支援

保育補助のために沖縄教区から保育士を派遣して頂いているこのプログラムも今年で4回目。常に福島の現状に関心を持ち、理解して頂いていることを感謝しています。また、回数を重ねる毎に絆が深まっている事を実感しており、今回も沖縄からの先生方へのあたたかな愛に包まれ、職員一同子ども達の未来のためにより一層励む元気と勇気を頂きました。



### 原発と放射線に関する特別問題プロジェクト

いっしょに歩こうプロジェクトの活動方針と2012年日本聖公会総会決議「原発のない世界を求めて」に基づいて立てられた委員会です。

運営委員：司祭相澤牧人(長) 司祭岩城聡 司祭越山健蔵 司祭笹森田鶴 宮脇博子

事務局長：池住圭 住所：福島県郡山市麓山 2-9-23 電話：0249-53-5987 fax：050-3411-7085

## 『日本と原発』 映画自主上映

2015年7月26日(日)午後2時より、東京教区阿佐ヶ谷聖ペテロ教会ホールで、映画『日本と原発』の上映会を開催しました。猛暑の中、40名を超える信徒・一般参加者が2時間を超える長編を熱心に鑑賞しました。以前、市民政治研究会が(茗谷・林野会館で)開催した講演会・上映会の席上、河合弘之弁護士自ら監督として映画を作るにいたった経緯について話されました。いわゆる「原子カムラ」は電力会社を中心に政・官・財界から各業界にまで影響力を持っているので、映画製作・配給に携わることには協力してもらえても、名前を出すことはすべて断られたのだそうです。そこで河合氏は映画館で上映する代わりに全国で上映会＝「有料試写会」を開催してこの映画を広めようと決意したそうです。

震災・原発事故以来、何かできることはないかと思いつつ多忙を理由に手をこまねいていた私は、映画を見て「多くの人に福島の実情を知ってもらいたい」と強く感じて、教会で上映をしたいと田光司祭、教会委員会に相談したところ教会主催の公開上映会としようということになりました。

『日本と原発』公式サイト (<http://www.nihontogenpatsu.com/>)「試写会・イベント」の開催・申込方法が載っています。

(東京阿佐ヶ谷聖ペテロ教会 江川栄一)

### しゃくなげ (時局コラム) 『福島の人々の現状』

震災と原発事故から今年で5年目という節目を迎えるなかで、私が暮らす福島県郡山市では年月の経過と共に『心の風化』が進んでいる事を感じます。

福島で生活するうえでは、放射能の影響によるリスクを受け入れざるを得ないという意識からか、人々の間で放射能や原発に関する話題が上る事が次第に少なくなってきました。しかし現実には、郡山市では現在も放射線量が高い『ホットスポット』と呼ばれる所が至る所に点在しています。また、テレビや新聞では毎日福島県内各地の空間放射線量が報道され、放射能を忘れる事が出来ない日常はこれまでと変わっていません。ここで暮らす人たちは放射能と自分なりに折り合いをつけながら、汚染される前の平和な日常を取り戻したい一心で生活しています。

先日、私のデスクに置かれていた福島県の放射能被ばくについて辛辣に書かれた報道雑誌を、小学生のお子さんを持つ女性がふと目にし、とても深刻な表情で「こういうものを見ると不安になる」と言っていました。それに対し、私は何と言ってあげれば良いのか分かりませんでした。彼女が本当は我が子に福島県で生活をさせるのが心苦しいものの、家庭の事情などでやむを得ず孤独や不安を抱えながら暮らしている事を知っていたので、不用意に彼女の心にさざ波を立ててしまった事を深く反省しました。

放射能汚染について詳しく調べれば調べるほど、また、ここで暮らす人への理解が深まるほどに、「大丈夫」と無責任に言葉をかける事が出来なくなっている自分がいます。

私はこのプロジェクトの働きに関わり、無関心は時に加害者と同等の意味を持つのだと思うようになりました。

どうかこれを機に、1人でも多くの方が福島県の現状や原子力発電について興味関心を抱き、平和を創るのは自分自身であるとの想いを共有して下さる事を願っています。(郡山事務所スタッフ 河盛芙海)